

「御蔵本日記」を読む

会員 山本節子

以前鹿野の「勝間田家」の御屋敷を見せてもらった。

大庄屋・庄屋・市年寄を勤めた勝間田家にも藩重役が止宿していた。宿札「宍戸備前宿」と「益田弾正宿」の木札二枚が残っている。

「禁門の変」での責任者として本藩三家老は、徳山藩へお預けとなった。家老の一人益田右衛門介は、益田から徳山への道中、ここ「勝間田家」へ宿泊している。生涯学習課の花田佳子先生より頂いた資料「随行日記」(筆者波田与一)により確認できた。

八月十一日 益田出足 徳佐止宿

十二日 徳佐出足 鹿野止宿

御宿勝間田信右衛門と有る

又、右衛門介護送責任者本藩矢田中衛の「益田右衛門介徳山護送記」にも

八月十一日 朝六時前須佐出発 徳佐止宿

十二日 徳佐出発 夕五時過ぎ鹿野宿着

とあり矢田中衛の記録では「勝間田家」への止宿は、明記されていないが、鹿野へ止宿とあれば「勝間田家」に泊まったと確信を得る。

しかし、この資料を見て疑問を感じる。

「随行日記」に

十四日 暮六ツ時(午後六時) 親施御着

「旦那様暮六時御着被遊候・・・徳山よりは一向役人出
浮無之」「御客屋御滞留」とあり。

この朝波田与一は、先触れとして出かけ土井にて、「徳
山内乱」の情報を得、栗山翁輔（益田家当役・護送の益
田家側の責任者）へ報告している。

十五日 七ツ時（午後四時）漸く御引受相成「御
目付衆物頭衆御客屋被参漸御引受相成
候」「総持院へ入る」とある。

又、「護送記」には

十三日 六時鹿野出発 夕七ツ半時徳山御客屋へ

着

十四日 夕方、矢田中衛総持院の仕構の見分をす
る。

十五日 夕七ツ半時、都合役・目付・番士・警衛
徒士・足軽など立ち合いのうえ請入れが
行われる。

ここで、十四日着の説、十三日着の説実際はどちらか、
色々資料を探してみるも確たる記述を見つけないことは、

出来なかった。しかし、一日又は二日御客屋で待たされ
たのは確かである。なぜ待たなければいけなかったか。
「この元治元年八月、徳山藩では何があったのか？」ま
た「徳山内乱」とは何か。

益田右衛門介が徳山に着いて御客屋で待たされたその
事情・徳山内乱の事情が知りたく、まず徳山藩の「御蔵
本日記」を読んでみようと思いい立ち、郷土史研究会古文
書解説会にて読み解く事となる。

元治元年八月の御蔵本日記に見る主な出来事をひろっ
てみた。

八月 四日・等覚寺清崖（正使）、大隆寺隠居晦巖（副
使）宇和島より大成寺着

七日・福原越後・益田右衛門介・国司信濃預りに
て、警衛役員決め

・右衛門介惣持院借上、囲締り仰付け
・国司信濃澄泉寺同断

八日・国司信濃徳山着澄泉寺へ受け入れ

九日・富山源次郎襲撃される

十一日・富山源次郎御役を解かれる

・本藩役人「木梨平之進」来る

・大成寺口・辻口・新丁番所の人員増、警護

厳重

・宇和島からの使僧二人宇和島へ帰る

十二日・御家中諸処入口・関門昼夜締切

・本城清・江村彦之進・児玉次郎彦・浅見安

之丞・岩崎謙同・井上唯一・庄原堂美術・

信田作太夫ら殉難七士を含む面々捕縛され

る。

一 梅も娘も舟を渡り國守の御
一 御守りも舟を渡り國守の御
一 御守りも舟を渡り國守の御
一 御守りも舟を渡り國守の御

『右の解説文』

一 桜馬場御用屋敷へ困い締め六ヶ所

調べ方仰せ付けられ候通り御作事方達候

一同所困い締め仰せ付けられ候に付き、働夫

荒仕子三人差出し候事

一 大城寺口関門外へ死骸これ有り候に付き、番人として
一 大城寺口関門外へ死骸これ有り候に付き、番人として
一 大城寺口関門外へ死骸これ有り候に付き、番人として
一 大城寺口関門外へ死骸これ有り候に付き、番人として

『右の解説文』

一 大城寺口関門外へ死骸これ有り候に付き、番人として

検断の者罷り出候様、町奉行所申し達し候事

一江村純一郎弟彦之進儀、大成寺口

関門外へ倒れ居り候に付き、見分として

御目付役坂田紀之丞取継役山県

弥三左衛門差越され候に付き、

検断の者耆人差出し候様町奉行所達し候

一児玉次郎彦自宅門内へ相倒れ

居り候に付き前条同様役人差出され候事

十三日・山口より本藩役人「寺内弥次右衛門」来徳

・御家中四ヶ所関門昼夜締切

十五日・益田右衛門介警護役員

鉄砲・棒・提灯などの準備

・桜馬場御用屋敷困締仰せ付けられ・・・

十六日・河田佳藏を岩国へ迎え

などなど

つまり、この時期（元治元年八月上旬）の徳山藩内で

は、藩始まって以来の大混乱に陥っていた。

藩論は俗論派と正義派がお互い牽制し合い、御用人「富

山源次郎」の襲撃、それに伴う源次郎のお役御免、「殉

難七士」等正義派への取締りなどで藩内が二分されている

いわゆる徳山内乱の時に、三家老の御預り（福原越後

は長府へ、国司信濃は清末へ、益田右衛門介は徳山への

予定であったが、この時期関門海峡では英仏米蘭四ヶ国

連合艦隊が馬関砲撃を仕掛け不安要素があると言う事

で、徳山藩にて三人共のこととなる。それに伴い預り人

の引き受け場所（寺院など）の手配・困締り・番人（昼夜）

人数増し・賄い等々目まぐるしい毎日であったので右衛

門介の受取も遅延したのではと思われる。

『註』「御蔵本」とは

長州藩の職制の一つ。蔵本都合役とも称し、藩の経費

いっさいに関する事務を執り行つた。

参考資料

・「随行日記」筆者波田与一（益田陣場奉行）

・「益田右衛門介徳山護送記」矢田中衛（本藩大組）

これは、以前この会にて解説し「資料紹介」されている。

・「御住居日記」